

氏名	加藤 彩雪
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第 213 号
学位授与年月日	2019（平成 31）年 3 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	D. H. Lawrence and Human Community: A Study of Mateship in <i>Kangaroo</i> (1923)
論文審査委員	主査 三神 和子 （英文学専攻 教授） 副査 佐藤 達郎 （英文学専攻 教授） 副査 ピーター・ロビンソン （英文学専攻 准教授） 副査 山口 俊雄 （日本文学専攻 教授） 副査 武藤 浩史 （慶應義塾大学 教授）

論文の内容の要旨

第一次世界大戦後の1920年代は、自国を離れ、外国を旅する作家を多く生み出した。D. H. ロレンス(1885-1930)は、いわゆる離国作家の一人として、1922年にイギリスを離れ、オーストラリアへ向かった。その後、イギリスに定住することは二度となかった。第一次世界大戦は、西洋人の意識を、大英帝国の過去の繁栄から、西洋文明の息詰まりへと転移させたという点において、非常に大きな意味を持つ出来事であった。ヨーロッパ内部で始まった争いが、アメリカの参戦によって調停されたことで、西洋がもはや世界の中心ではないという事実が明瞭になった。帝国主義や産業化、そして民主主義などの、西洋の産物の増長が頂点に達した時代、それが戦後のヨーロッパ社会に蔓延したニヒリズムの背景であった。1885年に生まれたロレンスは、このような西洋文明の凋落だけではなく、肉体や生命を軽視するキリスト教に異議を唱え、1922年にイギリスを離れ、非西洋諸国を転々と旅した。西洋文明からの逃亡ともいえるロレンスの旅は、共同体の模索という、漠然としたテーマと共に展開されることを見逃してはならない。特に1922年に執筆された『カンガルー』は、オーストラリアの共同体と主人公の接触を主軸として物語が展開する。

そもそも、人と人とのつながりを描くことは、ロレンスにとって最大の文学的テーマであった。しかし、他者を取り込み所有しようとする人間の欲求が、人間関係の中に生まれることを発見し、それをひどく嫌悪した。特にロレンスは、女性性や母性の中に、そのような欲求を見出した。他者からの独立を保ちながらも、いかに他者との生き生きとした関係を築くことができるのか、ということが、ロレンスが生涯探求し続けたテーマである。ロレンスは、近くに存在しながらも、

決して他者と一体化することのない個々の生命を、天空の星の動きに喩え、「星の均衡」という概念を作り出した。そして、ロレンスは、このような理想的な他者との関係に基づく共同体を「ラナニム」と名付け、第一次世界大戦中からラナニムの探求に傾倒するようになる。ラナニムの基盤として、「星の均衡」の他にもう1つ、「血の意識」というロレンス独自の概念がある。血の同盟とは、キリスト教の体現する精神性や宗教的なモラルと対を成す概念で、契約ではなく本能的に無意識のうちに結ばれる人間間のつながりの中に見出すことができるとロレンスは考えた。ロレンスの思想の核心には生命主義があると言われているように、生き生きとした生命の躍動感が感じられるような人とのつながりこそが、星の均衡と共にラナニムの双璧を成す概念である。母性に翻弄されたロレンスは、男性同士のつながりの中にラナニムを見出すことはできないかと思案するようになる。そして、ラナニム追求の場所となったのが、オーストラリアであることは注目する価値がある。

オーストラリアは大英帝国の植民地として発展したが、イギリスとは異なる文化を育んだ。その筆頭が、「マイトシップ」と呼ばれる、人間同士の助け合いの精神である。オーストラリアの自然は、イギリスの自然とは比べ物にならないほど、荒々しく獰猛であり、人間の侵入を冷酷にはねつけた。大陸横断鉄道が建設されたアメリカとは異なり、オーストラリアの内部にある不毛な砂漠地帯や、ブッシュと呼ばれる原生林の茂みは、人間の生存を脅かしたのである。そこで、人間の手に負うことのできないブッシュの野性の中で生きていくには、個人の力ではなく、仲間と協力しなくてはならなかったため、オーストラリアでは他者と協力をするという集団主義が育まれた。その集団主義は単なる男性同士の友情ではなく、それ以上の意味を持っていた。それは、本能的に他者と結びつくというロレンスの血の意識を表しているという点に集約される。生きることを目的として、共に活動し助け合う精神の中にロレンスは、必死に生きようとする生の躍動感を感じ取ったように思われる。また、マイトシップは、イギリスの階級意識とは対照的に、平等主義を唱え権威主義に反発した。共同体において、他者を支配し監視しようとする存在を否定するマイトシップは、男性同士の星の均衡を代弁しているようにも思われる。マイトシップは、オーストラリアを象徴する文化的な伝統となり、文学や芸術などあらゆる分野において、積極的に取り上げられてきたが、特に『ブレテン』と呼ばれるオーストラリアで初めて発刊された雑誌は、ブッシュで開拓に従事した男性を好んで取り上げ、ロレンスが『カンガルー』を執筆するインスピレーションを与えることとなった。

しかしながら、オーストラリアのマイトシップが、『カンガルー』で描かれるオーストラリアの共同体の基盤となっていることは、これまでの先行研究では指摘されてこなかった。むしろ『カンガルー』は、オーストラリアの共同体を正確に描いていないのではないかという視点から、イギリス人の批評家によって今日まで様々な非難にさらされてきた。共同体描写を、現実味がなく不自然であると見做すこのような批判の原因は、オーストラリアにはマイトシップという確固とした文化が存在しているということへの無知にあるように思われる。オーストラリアの文化的視点に立つのではなく、自国の既存の価値観に照らし合わせて『カンガルー』を読み解く時、一方的にロレンスの共同体描写を批判する解釈が生まれるように思われる。実際にロレンスは、オ

オーストラリア滞在中に『ブレテン』実際にロレンスは、オーストラリア滞在中に『ブレテン』を読んでおり、『カンガルー』の中にもマイトという単語が多数登場することからも、マイトシップについて知っていたこと分かる。特に、オーストラリアを代表する作家であるヘンリー・ローソン(1867-1922)の作品から、マイトシップについて学んだのではないかということが、書簡から推測できる。

ヘンリー・ローソンの作品をロレンスが読んでいたのではないかという指摘は2001年に、ポール・エガートによってなされた。しかし、エガートは、『カンガルー』のテキスト分析を行わず、ローソンの唱えるマイトシップがロレンスに与えた影響については言及していない。また、2015年にはデイヴィッド・ゲームが、オーストラリアがロレンスにとってラナニム追求の場になったことを指摘したが、オーストラリアのマイトシップが『カンガルー』におけるラナニムの構想の重要な下地となっていることは指摘していない。故に、民主主義や戦間期に見られる強力な政治的リーダーシップ、という西洋政治の視点ではなく、オーストラリア独自のマイトシップの伝統に基づいて『カンガルー』を考察することで、これまで問題視されてきた共同体描写への批判に一石を投じることができるように思われる。

博士論文ではまず初めに、星の均衡と血の同盟という2つの視点から『カンガルー』を考察し、オーストラリアのマイトシップが『カンガルー』に確かに反映されていることを証明する。特に、ローソンの描くマイトシップからロレンスが受け取った第一印象が、どのように作品に反映されているか考察する。そして、その第一印象が変化する過程を追いながら、オーストラリアのマイトシップが、ラナニムの実現をもたらすことができたのか否か考察する。換言すると、非西洋圏の文化的な条件が、ラナニムの基盤になりうるのかということを吟味することが論文の目的である。

そもそも、ロレンスにとって最も身近な男性同士の共同体は、炭鉱夫に見られるような労働者同士のつながりであった。炭鉱街であるノッティンガムで育ち、父親が炭鉱夫であったロレンスは、地下深くの暗い、危険の伴う炭鉱の中で共に助け合いながら活動する労働者の共同体から、文学的なインスピレーションを受けた。しかし、労働者としてではなく作家としてのキャリア形成や、世界を旅するというコスモポリタンな営為は、1920年代のロレンスの帰属意識を、労働者階級から少しずつ離反させることになった。また、第一次世界大戦の徴兵検査で不合格となったことで増長したイギリス社会への反感と憎しみは、オーストラリアの政治や社会への関心を喚起した。さらに、20世紀初頭のオーストラリアは近代化を遂げ、都市部に住む人口が急速に増加しつつあった。それに伴い、自然の中で育まれたマイトシップの伝統は、労働だけではなく、政治や文化といったあらゆる場面において人々を結びつける国家理念となっていた。このように、自身の階級意識の変化だけではなく、オーストラリアの近代化を認識したロレンスは、政治的な共同体を通して『カンガルー』の中でマイトシップを描いた。確固とした社会的な存在として、仲間と共に活動をする組織が、『カンガルー』の中で主人公が探求した共同体ラナニムの定義といえる。故に、生存のための協力を強いられない政治的な共同体においてマイトシップは、仲間との生き生きとしたつながりという本来の意味を保つことができるのか、ということ考察する

ことで、オーストラリアがラナニムの実現の場になったのかどうか明らかになる。

1章では、ロレンスがイギリスを去るに至った原因について、母性と第一次世界大戦に焦点を当てて考察をする。生命を生み出すという生物学的な母性の役目ではなく、他者を所有すよという欲求が、他者から生の躍動感を奪うという点に、ロレンスの描く母性の特徴があることが指摘される。また、第一次世界大戦での徴兵検査によって、自己の身体的な価値が否定されたことで、ロレンスの血の意識が大きく傷つけたことが、離国への動機となったことを述べる。

2章は、オーストラリアにおいて、マイトシップという集団主義がどのように誕生したのか、ブッシュと呼ばれる自然条件に注目しながら考察する。ヘンリー・ローソンの作品を分析しながら、マイトシップがロレンスの血の意識と星の均衡を体現していることを述べる。女性性が他者の生き生きとした生命を奪うのに対し、男性に見られる獰猛な生命の発露が、両作家の作品において、他者に生命を吹き込むロレンス独特の「男性のやさしさ」を体現しているということが強調される。また、オーストラリアの独特な死生観を分析することで、ローソンの作品もロレンス同様に、生命主義を重視していることを指摘する。

3章では、ローソンの作品からロレンスがスキミングしたマイトシップの伝統が、どのように『カンガルー』で表現されているか考察する。作品の中で棄却される社会主義とマイトシップを比較することで、マイトシップの体現する非権威主義と生命主義が浮き彫りになる。非権威主義に関しては、社会主義が財産の国有化などの法の措置を通して集団をまとめようと試みるのに対し、闘争する人間を縛る法の存在が、オーストラリアでは希薄であることが述べられる。また、生命主義に関しては、ロレンスにとって生命とはそもそも過剰なものであるという概念に基づき、社会主義の計画経済とマイトシップの血の意識が比較される。

4章では、ロレンスの解釈するアインシュタインの相対性理論が、星の均衡の概念を体現しているということを念頭にいれながら、人間間の均衡がフロイトの主張する母性によって崩壊する過程を考察する。オーストラリアの共同体のリーダーが、母性を体現していることを分析しながら、男性同士の社会も母権社会の伝統に根付いていることが論じられる。また、『息子と恋人』と『カンガルー』の類似点を指摘しながら、他者の生き生きとした生命を奪う母性は、血の意識を体現しないもの、つまり不自然な人間の欲求であることが述べられる。母性が生命のない怪物の比喩で語られることから分かるように、生命の躍動を体現しえないものをロレンスが不自然で異常な人間の欲求を考えていることが述べられる。

5章では、共同体のリーダーではなく、それに従うモップという現象に焦点を当てる。生命や身体の意識を超えたテレパシーという概念が、母子関係に支えられた共同体の根底にあることが、間主観、そして模倣という視点から論じられる。そして、他者と取り込もうとする母性を集団で模倣することで、破壊的な暴力が生まれ、暴動に発展するということを考察する。また、マイトシップの暴力が、主人公の戦時中の体験と共に語れることに注目し、ジュリア・クリステヴァのアブジェクションを援用しながら、オーストラリアのマイトシップは実は主人公が母国ですでに戦時中に目にしていた、恐怖の正体であろうことを述べる。最後に、主人公が生命溢れるブッシュを散策する場面とマイトシップの体現する人間の世界を比較する。自己の命を否応なく意識せざ

るを得ない生存条件を離れた時人間は、他者を支配しようとする母性によって共同体を運営し、そのような支配の中では独立した自我や生き生きとした生命も発揮されないことが述べられる。オーストラリアのマイトシップならば、ラナニムを見出せるのではないかと思案し、ローソンから学んだマイトシップを作品に投影させたロレンスではあるが、生存という目的を離れた時、オーストラリアのマイトシップもまた、社会主義や民主主義などあらゆる社会的、政治的な共同体同様に、他者を抑圧するモップとなってしまうと考えた。人との繋がりを求めながらも孤独に立ち返ってしまうロレンス自身の挫折を、マイトシップというオーストラリアの伝統をその背景に織り込むことでロレンスは、浮き彫りにしたといえる。連帯に憧れながらも、どうしてもそれに入り込めないロレンスの葛藤が、母性とかけ離れているように思われる男性同士のマイトシップを背景としたとき、悲しくも明瞭に浮き彫りになるのである。

論文審査結果の要旨

論文の概要

本論文は、20世紀初頭に活躍したイギリス人作家デヴィッド・ハーバート・ロレンス(D. H. Lawrence, 1885-1930年)がオーストラリアで執筆した長編『カンガルー』(*Kangaroo*, 1923年)を取り上げ、この作品をオーストラリアの文化的視点から読み解き、ロレンスの作品制作の意図を解明し、作品解釈に新たな光をあてることである。D. H. ロレンスは1922年2月自ら離国し、東南アジア経由で、5月オーストラリアに到着、3か月間滞在する。もともとオーストラリアに関心があったロレンスであったが、オーストラリアの自然と文化にじかに触れ、彼はそこでオーストラリアを舞台にした作品『カンガルー』の第一稿を短期間のうちに書き上げる。このようにオーストラリアはこの作品と密接にかかわっているにもかかわらず、オーストラリアの視点から考察されることはほとんどなかった。本論文はこの作品をオーストラリアの人間関係において特徴的な精神、マイトシップ(mateship)に着眼し、このマイトシップという視点から作品を読み解き、ロレンスの思想のさらなる解明を試みることにある。

本論文の構成は、以下のとおりである。

Introduction

Chapter 1: Human Relationship in Lawrence's Early Stories

1. 1 Lawrence and Women
1. 2 The Initiation of Rananim
1. 3 The Impact of the First World War

Chapter 2: Australian Mateship and Its Literary Influence on Lawrence

2. 1 The Wilderness of the Australian Bush
2. 2 Male Tenderness in Mateship

2. 3 The Symbolic Darkness of Mateship

Chapter 3: The Influence of Mateship on *Kangaroo*

3. 1 Lawrence as a Traveler, Outsider and ‘Pommy’

3. 2 The Problem of Law and Authority

3. 3 The Portrayal of Mortality

Chapter 4: Matriarchy within Male Community

4. 1 The Definition of Relativity

4. 2 Matriarchy within Law and Authority

4. 3 Maternal Love of Kangaroo

Chapter 5: Mob Spirit and the Symbolism of the Bush

5. 1 The Definition of Mob

5. 2 The Identification of Collective Violence

5. 3 The Symbolism of the Bush

Conclusion

Notes

Works Cited

序文では、イギリスや西洋のなかに理想の人間同士のつながりを求めることができないと悟った D. H. ロレンスがイギリスを離国する精神的経緯を述べる。また、『カンガルー』に対する否定的先行研究、および 21 世紀になってオーストラリアとロレンスとの関係に着目し始めた先行研究について述べる。

第 1 章では、人とのつながり方に関心を持ち、彼の文学上の最大の主題に置いたロレンスが、はじめは母親や女性との関係を主題にしていたことを、ロレンスの初期の作品である『息子と恋人』を分析することで説明し、やがて、彼の関心が「ラナム」という理想の人間関係に基づく共同体の模索へと移ったこと、およびその共同体を求めて離国したことを説明する。個の尊厳を保ちながらも、孤立するわけではなく、他者との間に生き生きとした生命の躍動を感じられる関係を築くということが、ロレンスの一貫したテーマとなっているが、『息子と恋人』(1913 年)が「母性」からの逃亡がテーマになっているように、他者を取り込み所有しようとする女性の母性を、母親ばかりでなく恋人の中にも見つけたロレンスは、女性との関係の中に、この個の尊厳を保つ関係を築くことはできないと悟る。やがて、彼はこの関係を理想的な「共同体」のなかにもとめるようになり、その共同体を「ラナム」と名付け、1914 年から、「ラナム」の実現を求めるようになる。この「ラナム」の支柱になっているのは「血の意識」と「星の均衡」という概念である。一言で説明すれば、「血の意識」は本能的な無意識のうちに結ばれる人間同士の繋がりであり、「星の均衡」は近くにいながらも、決して他者と一体化することのない個々の生命の関係のことである。ロレンスは男性同士の繋がりの中ならば、「ラナム」を見いだせると考える。しかしながら、第一次世界大戦が大きな契機になり、イギリス社会にもはや「ラ

ナニム」を見つけることができないと悟ったロレンスは離国する。オーストラリアに関心を抱いていた彼は、初めからオーストラリアに滞在するつもりだった。

第2章では、ヘンリー・ローソンの描くマイトシップがロレンスの「血の意識」と「星の均衡」に共鳴することを明らかにする。まず、マイトシップが誕生した背景と言葉の意味を説明し、マイトシップがヘンリー・ローソンによってどのように彼の作品の中に描かれているかを論じる。オーストラリアの大部分が「ブッシュ」と呼ばれる原生林で覆われ、その奥地では人間の生存をことごとく脅かし、個人の挑戦をはねつけ、仲間と助け合いながら生きていかざるを得なかったことが、マイトシップという友情を超えた男性同士の絆の文化を育んだ。ブッシュとマイトシップは、オーストラリアの絵画や文学の中に描かれ、オーストラリアのアイデンティティとして定着していった。特にオーストラリアの国民的作家ヘンリー・ローソンはこの題材を詩や短編で取り上げ、彼の作品を『ブレテン』誌は好んで掲載し、開拓時代の人間の絆を伝えた。ローソンの詩「羊の毛刈り人たち」(1888年)や短編「マイトシップ」(1891年)など、いくつかの詩や短編を例に挙げて考察し、ローソンの描くマイトシップがロレンスの思想と共鳴することを説明する。『ブレテン』誌をロレンスがオーストラリア滞在中に読んでいたことを説明する。

第3章からは、『カンガルー』を具体的に読み解きはじめ、ロレンスがローソンから汲み取ったマイトシップが理想の共同体の実現をもたらすことができるのかどうか、つまり、20世紀初頭のオーストラリアのなかにマイトシップで結びついた共同体を見つけることができるかが論じられ始める。まず、この3章では、イギリスからやってきたこの作品の主人公リチャード・ロヴァト・サマーズがオーストラリアにたいして感じる第一印象がローソンの描くマイトシップと共通項をもつことを論じている。サマーズはジャック・コレットと出会い、彼と付き合うとき、本能的な同志意識を感じ、安らぎを得る。この同志意識の安らぎはロレンスの「血の意識」に共通する。そしてコレットをとおして、ディガーズという組織を知るのだが、ディガーズは男性のマイトシップを基に新しいオーストラリアを作ろうとする政治結社で、社会主義組織と対立している。その対立を通して、ディガーズがマイトシップの非権威主義と生命の活力の尊重に重点を置いていることが示されている。社会主義は生産手段の社会的共有により階級対立のない社会を実現しようとしているが、これも、法律を作って人間をまとめようとすることであり、法律という外部の権威によって形成される共同体をサマーズは否定する。一方彼の印象では、オーストラリアは法律に過度の権威を与えていないように思えるが、これはオーストラリアの奥地では仲間と協力せずには生きていけなかったため、法律という権威で人間を縛る必要がなかった当時のオーストラリアの共同体の底流に流れている考え方である。この法律の権威付けの否定はローソンとロレンスに共通する。また、サマーズはディガーズの創始者でカンガルーというあだ名で呼ばれているベンジャミン・クーリーに初めて会った際、生命の本流ともいう激しい活力を感じ、彼に惹きつけられる。クーリーはあだ名が示すとおり、カンガルーに似た醜い容姿をしているが、野生の動物の持つ激しい生命力をあらわしている。クーリーの不死を願うのではなく、死は常に生と共にあるからこそ、生を謳歌するという考え方は、ロレンスとローソンに共通する。

第4章では、はじめのうちこそ、ディガーズがマイトシップを再現している共同体のようにみ

えるが、じつは、ディガーズが違う側面を持っていることを論じている。すなわち、ディガーズにおいては、ロレンスの理想の共同体に不可欠な「星の均衡」およびローソンのマイトシップを保つことができないことを論じている。男同士の共同体においても、他者を支配する母性が働くからである。男性のクーリーはディガーズにおいてリーダーシップを発揮する人物であるが、カンガルーでも、子どもをおなかの袋に入れて育てる雌のカンガルーに例えられており、女性性も与えられている。ここでは子どもを産み育むという肯定的な意味ではなく、ポーチという袋の中に子どもの体をすっぽり包み込み、子どもと一体になる母親の姿、仲間を自分の思想により支配し、取り込もうとする否定的な意味の母性として表わされている。つまり、クーリーも母性を発揮し、他者を支配しようとする点において、ロレンスの「星の均衡」を築けないことを示している。クーリーがサマーズに自分の考えを引き継ぐように迫り、自分のおなかにサマーズを近づけるときの、このクーリーの母性の支配力が暴露される。また、作品の中で「相対性」という言葉が使用されていることに着目し、「星の均衡」、マイトシップの絆にあたる人間同士の関係をロレンスがアルバート・アインシュタインと結び付けていることを指摘し、「相対性」が母性の支配欲によって壊されることを論じている。

第5章は、ディガーズのリーダーに従う群衆(mob)という存在に注目し、彼らの群集心理が母子関係にあるとしたロレンスの考え方が作品に示されていることを論じている。ロレンスはモップとは、母的存在の体現する理念を盲目的に集団で模倣し、再現することだと、つまり、クーリーの母性的権威が彼の跡継ぎたちによって集団で模倣される行為だと考える。サマーズはディガーズの人々が暴徒と化すおぞましさを感じ取るが、それが以前彼が第一次世界大戦中イギリスで体験した恐怖に似ていることを悟る。ジュリア・クリステバの「アブジェクション」「内なる他者」の批評理論を援用しながら、サマーズの恐怖が、じつは彼がイギリスで戦時中に体験した恐怖への回帰にすぎなかったことを説明し、20世紀初頭のオーストラリアのマイトシップでつながっていると思われる共同体も、モップの蛮行の可能性を秘める腐敗した存在であることを論じている。サマーズは人とのつながりを求めながらも、連帯にあこがれながらも、幻滅を感じを得ない。

結論、ロレンスはオーストラリアの伝統のマイトシップに期待し、時代が変わってもなお20世紀初頭の近代化された時代にも息づいていると考え、そこに理想を見つけられるのではないかと思ったが、時がたつにつれ、ローソンの描いた開拓時代のマイトシップは、20世紀初頭の時代において、しかも政治の世界に適用されるようになると、他者を取り込む母性によって破壊され、腐敗した共同体の姿を露見するばかりになっている。『カンガルー』の登場人物たちは、自分たちの共同体は開拓時代のマイトシップを体現していると思っているが、20世紀のオーストラリアの共同体にマイトシップを求めることがもはや不可能であることを、主人公のサマーズとロレンスだけが見抜く。ここにオーストラリアに「ラナム」の構築をめぐるロレンスの失望を見ることができる。この失望の後、ロレンスは『チャタレー夫人の恋人』(1928年)に見られる男女間関係をユートピア的に描いていると説明する。

論文審査の要旨と結果

審査委員会で本論文の学術的に積極的に評価すべき点として以下の見解が表明された。

第一に、D. H. ロレンスの『カンガルー』をオーストラリアの文化的視点に立って読み解き、この作品の解釈及び評価に新しい光を与えたことである。これまでの先行研究において、この作品の主人公サマーズに係わる「共同体」の描写は未熟であるとして、この作品を批判する解釈が生まれてきた。それらの批判に対して本論文はオーストラリアのマイトシップという人とのつながりにおける伝統的な価値観に着目し、この作品がロレンスの理想の共同体である「ラナニム」構築の可能性を問うた物語であり、マイトシップが「ラナニム」実現を託した概念であることを見出した。そしてこのマイトシップに沿って作品を読み解いた。この新しい解釈はロレンス研究に貢献するものであり、高く評価することができる。21世紀になり、ほんの少数の研究者がロレンスとオーストラリアの関係に気付き始めたが、マイトシップと『カンガルー』の結びつきを真っ向から論じた研究者はまだいない。

第二に、ロレンスがオーストラリアの国民的作家、ヘンリー・ローソンを読んでいたことは、ロレンスの書簡からわかっているが、マイトシップの概念を彼から摂取していることを、ローソンの詩や短編を具体的に考察することで明確にしている点である。作品の中において、マイトという単語が数多く登場することから、彼がマイトシップについて知っていたことは確かである。今まで、ロレンス研究において彼がローソンを読んでいたのではないかということ指摘した先行研究はあるが、ローソンの唱えるマイトシップとロレンスのつながりを具体的に考察してはいない。本論文はローソンの作品の中に描かれるマイトシップを具体的に検証することによって、それらがロレンスの思想である「星の均衡」や「血の意識」、つまり、「ラナニム」を構築する思想と共鳴することを説明し、ロレンスがローソンからマイトシップの概念を摂取したことが確かなものであることを証明している。

第三に、ロレンスがローソンの作品を好んで掲載していたオーストラリアの週刊誌『ブレテン』誌に着目したことも、評価できる。ロレンスが『ブレテン』誌を読んでいたことを、彼の妻フリーダの証言などの精査によって証明したことは、ロレンスとローソンの結びつきをより確かに示すものとして効果的である。

ロレンスの『カンガルー』は北半球イギリスの対蹠地であるオーストラリアを舞台にした作品であるが、今までオーストラリア独自の視点から捉えられることはほとんどなかった。本論文はオーストラリアの文化的視点に立ち、オーストラリアの精神的土壌である、ブッシュ、培われた精神、マイトシップ、それらを文学にあらわしたヘンリー・ローソンを考察し、またローソンの作品を掲載した週刊誌『ブレテン』誌等を視野に入れることによって、ロレンスの思想との関係を考察した論文である。新しい作品の読みを与えている点において、また、自ら離国したロレンスが、もはやイギリス中心主義、西欧中心主義から脱皮していることを示すものとして、ロレンス研究に大きく貢献するものであると考えられる。

以上、本論文の高く評価すべき主要な点を挙げたが、審査委員会では、質問や批判も出された。まず、論文全体に対して、『カンガルー』以外の作品が既存のステレオタイプ化した解釈になっ

ており、もう少し作品解釈を丁寧に行うべきである。次に、本文全体の論の運び方が一直線に結論に向かっており、論文として奥行きが足りない印象を受ける。ひとつの事柄において、もっとロレンスのほかの考え方も論に組み込み、それらを展開しながら、論を言いたい内容に運んでいくという粘り強さが足りない。たとえば、本論で扱われている母性は個を支配する存在として悪い側面ばかりが述べられているが、ロレンスが母性を肯定的にも捉えていることは他の作品に書き込まれている。それらを説明したうえで、説得力をもって論を進めるべきである。三番目に、母性の考え方に関連して、自然観についてもっと明確なロレンスの考えが提示されるとよかった。自然観については広くイギリスの自然観の歴史を踏まえたうえで、さらなる考察が必要である。四番目に、論文中出てくる“mortal”という単語の使い方について質問が出された。この言葉を「死すべきものとして生き生きと生を生きる」の意味を含めた言葉として使用しているが、この使い方は強引なのではないか、どこから持ってきたのかという疑問である。これに対しては、公開審査会においてこの言葉がヘンリー・ローソンの言葉であり、その使い方をロレンスが真似て使用してことが説明されたが、論文中にもっと丁寧に説明するほうがよい。五番目に、『ブレットン』誌について、ローソン以外に掲載された記事についても考察を深める必要があることが指摘された。さらに、ケアレスミスによる英語の間違いについて指摘があった。

結論

本論文は、以上のように解決すべき問題を有するものの、テーマの独創性、研究手法の妥当性、議論の実証性と一貫性において学術論文として博士（文学）の学位に十分に値すると、審査員全員一致で判断した。